

日本人が間違えやすいドイツ語の発音*

トーマス・グロース

外国語を習い始めるときには、外国語の発音は初めての壁となる。このため、ほとんどすべての外国語授業は発音の説明や練習から始まる。言語学習のほかの分野（文法・単語など）と比較すると、発音は難しくない。ある言語に存在している音の数とそれらのコンビネーションの数は比較的少ない。覚えなければならない単語の数ははるかに大きい。さらに、自分の母国語にない音は比較的少なく、似ている音や少し練習したらできる音がどの外国語にもたくさんある。

しかし、発音とは、それぞれの音を正しく発音することではない。言語を話すときには、音を発音するのが当然だが、コミュニケーションというのは、音の鎖を作ることではない。言語コミュニケーションとは「発言」で、発言は「文」から成り立っており、文は「単語」から成り立っている。しかし、単語は音からというより、むしろ「音節」から成り立っている。結局、音節が「音」から成り立っている。

それぞれの音には正しい発音があると同様には、それぞれの音節・単語・文の発音がある。日本人にとっては、やや難しい音はいくつかあるが、音の発音よりも、音節の始まりと終わりなどを決めるのがもっと難しそうである。さらに、単語と文には、また特別な発音の特徴がある。単語にはアクセントがあり、同じ音から成り立っている単語はアクセントで区別される。文には、メロディとリズムがある。ドイツ語のメロディは日本語のメロディとそんなに違わないが、リズムが大きく違っている。

しかし、その説明に入る前には、もっと基本的なことがある。音・音節・単語・文を発言することには、二つの動作が必要になる。まず、口を動かすことである。口というのは、様々なところからできている。口を動かすのは、唇にある形をさせるだけではなく、舌先の向きと舌背の曲がりも大切だし、喉が開くかやや閉まるかということもある。しかし、唇・舌・喉を動かすことだけでは不十分である。肺から空気を喉と口を通して吐くことも必要になる。空気を吐くことも調整できるのである。大きい声で話したいときには、口を比較的大きくし、空気をたくさん吐くのが必要になる。

日本人は特に気流の調整と口の動きに弱い。声がいつも小さすぎて、口の動きが不十分なので、歯切れが悪いというのが二つの大きな理由である。

しかし、いったいなぜきれいな発音を覚えなければならないのだろうか？これに対しては、大切な答えがいくつかあるが、これで一番重要な答えを二つ取り上げたい。

1. 聞き取りは発音との緊密な関係があるので、発音できないところは聞き取れないし、聞き取らないところは発音できない。発音の上手な生徒は聞き取り練習も上手で、発音の下手な生徒は聞き取りにも下手である。
2. 歯切れのいい発音はきれいな服装と同様であり、つまり外面的なものである。様々な調査によると、発音の下手な外国人は頭のよくない人と見なされる傾向があるということである。逆に、発音の上手な外国人は頭のいい人と扱われているそうである。発音のよさ（つまり外面）と頭のよさ（つまり内面）を一致させるのは、もちろん差別主義的だが、世の中はそうしたもののなのである。差別されたくない人には、発音練習の大きな動機ができていると言えているであろう。

これから、まず日本人に覚えにくいドイツ語の音を紹介し、その後、ドイツ語の音節の組み立てを説明する。そして、単語のアクセントを説明する。その後、文アクセント、メロディとリズムを紹介する。最後には、発音練習の一般的なアドバイスをする。

I. ドイツ語の難しい音

どの言語にも、音が二種類ある：母音と子音である。

1) ドイツ語の母音

日本語より、ドイツ語の母音は多いが、ほとんど似ているものである。特に、基本的な母音の価値が大体同様である。そのため、覚えるべきなのは、次の規則である：

ドイツ語	a	e	i	o	u
日本語	あ	え	い	お	う

しかし、多少の違いがあるから、注意しなければならない：

- (1) 「a」は日本語の「あ」より口を大きくする。



写真1：ドイツ語の「a」

(2)「e」では、場合によって、発音が違っている。普通の「e」は、口のすみを開いて上げ、口の形はニコニコするような形をとる。特に、アクセントが置かれる「e」が入っている音節ではそうしなければならない。



写真2：ドイツ語の「e」(口のすみが開く)

アクセントを受けない「e」では、口のすみをリラックスさせ、ちょっとにぶい音となる。



写真3：ドイツ語の「e」(口のすみがリラックスしている)

例： Meer (海) (写真2を参考)
Blume (花) (写真3を参考)

(3)ドイツ語の「i」と日本語の「い」はほとんど同じである。



写真4：ドイツ語の「i」

(4)ドイツ語の「o」には、二つある。一つは丸くて、母音の長い単語に出る音である。



写真5：ドイツ語の「o」(丸いほう)

二つ目の「o」は、より口が開いている母音であり、母音の短い単語にでる音である。



写真6：ドイツ語の「o」(開いているほう)

写真2の「e」と比較すると、写真6の「o」はより幅が狭いので、注意が必要になる。

例： Morgen (朝) (写真5を参考)
Looch (穴) (写真6を参考)

(5) ドイツ語の「u」は日本語の「う」より口が丸いから、注意を払うべきである。



写真7：ドイツ語の「u」

しかし、ドイツ語には、日本語にない母音もある。それらは「ä・ö・ü」であり、「Umlaut」と呼ばれている。

(6)「a-Umlaut」(文字は「ä」)とは「e」に比較的に近いが、口の縦がもっと開いている音である。たての高さは「a」まで行かない。



写真8：ドイツ語の「a-Umlaut」(文字：「ä」)

(7)「o-Umlaut」(文字は「ö」)とは、多分日本人にとっての一番難しい母音である。様々な練習方法があるが、私が薦めたい方法は次のである：舌を「e」(口のすみがりラックスしているほう = 写真3を参考)の形のしながら、口を丸くするのである。



写真9：ドイツ語の「o-Umlaut」(文字：「ö」)

日本語には、「o-Umlaut」ぐらい口を丸くしなければならない母音がないので、それに慣れていないため、口を十分に丸くしないから、「e」(口のすみがりラックスしているほう)に聞こえてしまう。

しかし、母音の価値がことばを区別する機能であるので、十分に発音上で区別しないときには、ことばの意味がはずれてしまうこともある。

例： kennen (知っている)
 können (できる)

(8)ドイツ語の「u-Umlaut」も日本人に難しそうな音だが、地方による日本語にはあり、長い「うー」に似ている母音である。できない人に次の練習方法を薦めたい：舌を「i」の形をしながら、口を丸くするのである。



写真10：ドイツ語の「u-Umlaut」(文字：「ü」)

(9) 二重母音

二重母音とは二つの母音が並んでいるものである。しかし、任意の母音をあらゆる母音と組むことはできない。簡単に言えば、開いている母音と閉まっている母音を組むことが可能である。

あ)「ei・ai・ey・ay」はすべて「アイ」と発音する。

い)「eu・äu」はすべて「オイ」と発音する。

う)「au」はいつも「アウ」と発音する。

2) ドイツ語の子音

子音は母音よりよくあられる。これから、日本語の子音に似ているドイツ語の子音と日本語にない子音を中心にしたい。「b/p・d/t・g/k・s/z」の子音は日本語とドイツ語で同様なので、細かく説明する必要がない。しかし、子音の作り方は舌の形によるので、次の図を見たら、よく分かるはずである。

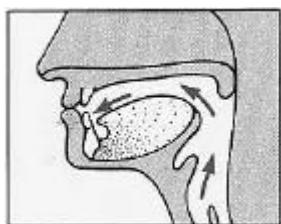


図1：「b」と「p」¹

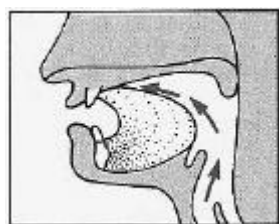


図2：「d」と「t」²

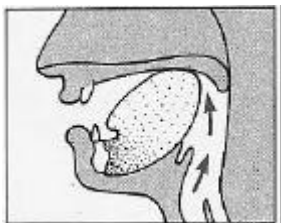


図3：「g」と「k」³

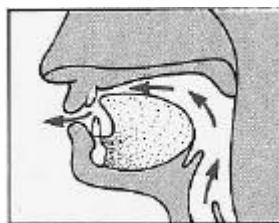


図4：「s」と「z」⁴

2 - A) 日本語に似ている子音

(1)「f」という音とは、英語の「tish」の最後の子音である。日本語にも、「し・しゃ・しゅ・しょ」があるので、似ている子音であろう。ドイツ語で書くと、普通に「sch」で書く。日本語の「f」では、唇はあまり丸くなっていないので、日本語風にドイツ語の「f」を発音してみると、浅すぎるように聞こえる。しかし、唇の形だけではなく、舌の形も大切である。舌の中部をできるだけ口蓋のほうに移動するのが重要である。



写真 1 1 : ドイツ語の「f」

「f」の子音は、「sch」で書かれないうきもある：音節が「st」か「sp」で始まると、「ft」か「fp」を発音しなければならない。

例： Student (大学生) 「ftudent」
Sport (運動) 「fpo:at」

次の例では、「s」と「t」と「s」と「p」には音節の区切りがあるから、「f」の発音にならない：

例： Diskussionsthema (議題)
Bildungsproblem (教育問題)

(2)ドイツ語の「f」と「w」は作り方が同様で、吐き出した気流の強さだけで区別する。「f」に似ている音は日本語にあるが、「ふ」の音を作ると上と下の唇を吹くような形をする音である。こういう音は「両唇音(りょうしんおん)」と呼ばれる。しかし、ドイツ語(と英語・フランス語)の「f」は両唇音ではなく、「唇歯音(しんしおん)」である。上の歯列を下の唇を合わせかけながら、そのすきまを通して空気を吐き出すという音である。



写真12：ドイツ語の「f」と「w」

口の中の気流は下の図を見れば分かる：

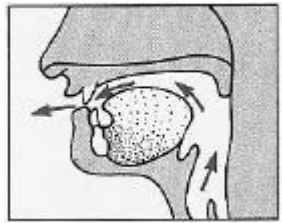


図5：「f」と「w」⁵

(3) ドイツ語の「n」は、日本語の「ナ」の子音と同様だが、日本語のかなとして「ん」があり、この文字の読み方が大きく変わるので、注意しなければならない。例えば「ろんぶん」の初めての「ん」は「n」ではなく、よりも「m」として発音される。さらに、「ほんを(読む)」の「ん」はまた「ん」ではなく、「ん」に似ている音である。

ドイツ語の「n」を発音するときは、口を閉めてはいけなから、注意をはらわなければ歯切れが悪くなる。



写真13：ドイツ語の「n」

口の中は次のように見える：

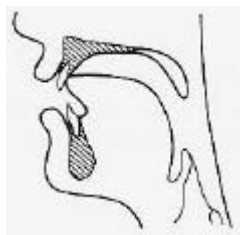


図6：ドイツ語の「n」⁶

(4) ドイツ語には、「ほんを(読む)」の「n」のような音はあるが、いつも「ng」として書かれる。日本人はこの音をほとんど正しく発音しない。

例： bringen (もってくる)

日本人は上のことばを「ブリンゲン」として発音してしまうが、正しいのは「プリンエン」である。

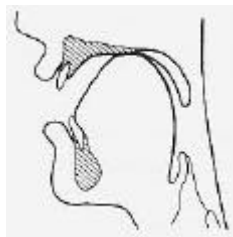


図7：ドイツ語の「n」⁷

2 - B) 日本語にないドイツ語の子音

(5) 日本語にない音は「x」であり、ドイツ語では「ch」で書かれる。この音は「a・o・u」の後にしかない。口蓋を閉めて、そこで気流を障害する。喉につまったものを出すような音である。

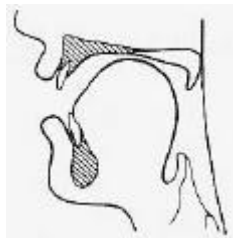


図8：ドイツ語の「x」⁸

特に注意を払うべきのは、ある名詞の単数形から複数形への変化なのである。

例：	Dach (屋根)「x」	Dächer {複数形}	「ç」
	Loch (穴)「x」	Löcher {複数形}	「ç」
	Buch (本)「x」	Bücher {複数形}	「ç」

(6) 日本人にとっての一番難しいドイツ語の子音は「r」であろう。日本語に

全然でてこない音ではあるが、心構えの問題もある。日本語をローマ字に書き換えると、「ラ行」を「r」にするという習慣があるため、日本人は英語の「r」もドイツ語とフランス語の「r」もきれいに発音しない。同じ文字を書いても、音の価値が違っているという理解が必要になる。

ドイツ語の場合には、「r」には、前の音と後の音の価値によって、違う発音があることを意識すべきである。「r」が母音の直後にでるときは、「a」として発音したら、問題がない。

例： Morgen（朝） 「mo:agen」
er（彼） 「ea」

難しいのは、「r」が音節の頭か音節のなかの母音の前にでるのである。この音を正しく作るには、「口蓋垂」や「のどひこ」と呼ばれるものを動かさなければならない。下の図を見れば、のどひこのところが分かる。

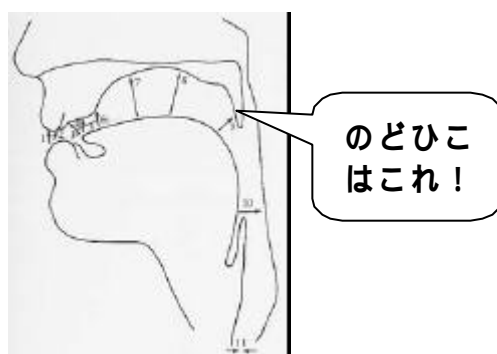


図9：「のどひこ」のところ⁹

「r」の正しい発音は、のどひこを震えさせるのであるが、練習しないと、日本人には簡単にできない。しかし、うがいをするような音なので、少し練習したら、できるはずなのである。

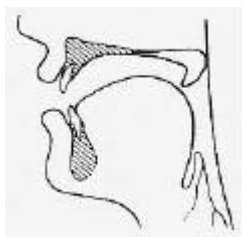


図10：ドイツ語の「r」¹⁰

「r」が子音の後と母音の前にでたら、少しごまかしてもかまわない。(5)の「x」を作るところがのどひこと一番近いので、「r」のかわりに「x」を発音してもよい。

例： **Bruder** (兄・弟)
Drache (龍)
Frau (女)
Grieche (ギリシャ人)
Kraft (力)
Prädikat (述語)
streng (厳しい)
trrinken (飲む)

上の下線を引いた「r」は「x」として発音してもよい。もし、この「x」をマスターできたら、音節の頭の「r」にも適用できる。しかし、子音の後よりそっとしなければならない。

例： **Rat** (アドバイス)
Reh (鹿)
Riss (罅)
Rot (赤い)
rudern (漕ぐ)

下線の「r」をそっとした「x」として発音すると良い。

(7)「r」と区別しなければならないのは「l」である。日本人の個人的な発音によって、ラ行を「l」に近いほうにする日本人もいるが、実は日本語には「l」がないと言えよう。「r」と「l」がまったく違っているところで作られるので、まったく違っている音であることを意識しないと、きれいな発音にならない。日本語のラ行の「r」は瞬間的な音だが、「l」は連続音なので注意が必要になる。「l」の正しい作り方を練習するときは、まず、「t」か「d」を発音しようとするような形をとる。

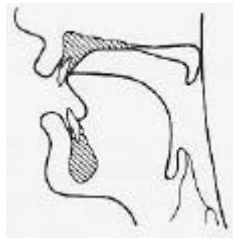


図11：ドイツ語の「l」¹¹

「t」か「d」の形にしたら、舌先を少し歯列のほうに下げる。そして、舌の左と右の側面を下げる。この状態では、「a」の母音を発音しようとしても、うまくできない。「a」よりも「e」みたいな音（写真3を参考）に似ている。なぜかという、舌先が歯茎についていれば、口が十分に開かない。口を開くと、「a」となる。心構えにとっての一番大切なのは、「r」とは違って、「l」は連続音であるという意識である。

「r」と「l」の区別は、単語の区別にもなるので、ドイツ語に非常に大切なのである。

例：	Rauch	（煙）	vs	Lauch	（ねぎ）
	regen	（動く）	vs	legen	（置く）
	Ried	（沼地）	vs	Lied	（歌）
	rot	（赤い）	vs	Lot	（測鉛）
	Ruder	（オール）	vs	Luder	（やつ）

特に、同品詞の単語は落とし穴になりうるので、注意をしなければならない。

II . ドイツ語の音節

日本人は小学校から漢字を学ばなければならない文化で暮らしているので、アルファベットを使う文化より、文字を中心にしがちである。このため、日本人は「音節」の概念と「拍（はく）」の概念をよく間違えてしまう。「音節」とは、発音上の概念で、「拍」とは、文字にかかわっている概念である。普通には、日本語の音節と日本語の拍は同じだが、異なるときもたくさんある。

例：	かう	（買う）
	かとう	（「加藤」という名前）
	かんばん	（看板）

「かう」には、拍が二つあるが、音節は一つしかない。「かとう」には、拍が三

つあるが、音節は二つある：「か」と「とう」。「かんばん」には、拍が四つもあるが、音節はまた二つしかない：「かん」と「ばん」。

1) ドイツ語の音節の組み立て

日本語の音節は「ん」以外の子音に終わらず、普通には、母音に終わる。しかし、ドイツ語の音節の組み立てはもっと複雑である。ドイツ語の音節はどんなに複雑でも、常に母音か二重母音が中心であるのが確かである。母音の前には、一つかいくつの子音がでることもある。母音の後も同様である。

音節の頭の子音を「頭」と呼び、母音を「体」と呼び、音節を終わる子音を「足」と呼んでみる。

(1) 頭も足もない音節

例： Ei (卵)

音節		
頭	体	足
-	Ei	-

(2) 足がない音節

例： ja (はい)
 froh (うれしい)
 Stroh (わら)

音節		
頭	体	足
j	a	-
fr	oh	-
Str	oh	-

(3) 頭がない音節

例： ein (男中性不定冠詞)
 eilt (急いでいる：3人称単数現在形)
 Obst (果物)
 unkst (不幸を预言する：2人称単数現在形)

音節

頭	体	足
-	ei	n
-	ei	lt
-	O	bst
-	u	nkst

(4) 足が一つある音節

例： ein (男中性不定冠詞)
 Bein (足)
 Spott (ひやかし)
 Streit (喧嘩)

音節		
頭	体	足
-	ei	n
B	ei	n
Sp	o	tt
Str	ei	t

(5) 頭が一つある音節

例： ja (はい)
 Bein (足)
 halt (止まれ)
 seifst (せっけんをすりこむ：2人称単数現在形)
 winkst (腕を振っている：2人称単数現在形)

音節		
頭	体	足
j	a	-
B	ei	n
h	a	lt
s	ei	fst
w	i	nkst

(6) 頭も足も二つ以上ある音節

例： bring (もってこい)

trinkt (飲んでる : 3 人称単数現在形)
 spring (飛べ)
 sprichst (話している : 2 人称単数現在形)
 trinkst (飲んでる : 2 人称単数現在形)

音節		
頭	体	足
br	i	ng
tr	i	nkt
spr	i	ng
spr	i	chst
tr	i	nkst

2) 前の音節の足か次の音節の頭か？

母音の後にでる子音はその母音と一緒に音節を作るか次の音節の頭になるかというところは日本人に判断しにくいようである。一般の規則として、「頭のほうが足より大切だ」というのを覚えればよい。

例： spre-che (話している : 1 人称単数現在形)
 ge-spro-chen (話す : 過去分詞)
 Bil-dungs-pro-blem (教育問題)
 Dis-kus-sions-the-ma (議題)
 Ar-beits-ei-fer (努力)
 Ab-fall-ei-mer (ゴミ箱)

「spreche」のばあいには、「ch」と書いてある「x」の音は二番目の音節の頭になる。複数の子音があっても、前の音節の足にならず、すべて次の音節の頭になる。「gesprochen」はそういう例である。しかし、「Bildungsproblem」では、初めての「l」は初めての音節の足になり、「d」は二つ目の音節の頭になる。なぜかという、「ld」という組は単語の頭にでられないからである。つまり、「ld」で始まる単語はドイツ語に一切ないというのである。一方、「spreche」を見れば、「spr」は単語の始まりにでることができると分かる。このため、「gesprochen」では、「spr」は二つ目の音節の頭になりうる。複合名詞の「Bildungsproblem」にも「Diskussionssthema」にも「s」が二つの名詞を分ける。この「s」は常に前の音節の足の部分になる。二つ目の名詞の初めての音節の頭がない単語もあるので、「s」と次の母音の間に「ッ音便」みたいなポーズを入れなければならない。

そのため、「Arbeitseifer」を「Arbeits'eifer」と発音すれば正しい。しかし、二つ
の名詞を分ける「s」がなくても、母音で始まる二つ目の名詞の前にポーズを入
れなければ正しくならないので、注意を払わなければならない。

III . 単語

1) アクセント

ドイツ語には一つの音節から成り立っている単語はたくさんあるが、二つ以上
の音節から成り立っていれば、一つの音節にアクセントを置かなければならな
くなる。同音語の単語は日本語よりはるかに少ないが、ありはする。同音語は
普通アクセントで区別するので、アクセントの位置が分からないと、コミュニ
ケーションが失敗することも想像できる。

例：	<i>August</i>	(男の名前)
	<i>August</i>	(八月)
	<i>Tenor</i>	(主旨)
	<i>Tenor</i>	(テノール)
	<i>umfahren</i>	(乗り物をぶつけて倒す)
	<i>umfahren</i>	(乗り物で周囲をまわる)

例はまだたくさんあるが、上の三つのペアを見れば、単語の意味がアクセント
にかかわっていることが分かるはずである。

ドイツ語には、アクセントのタイプが二つある。一つは、「メロディック・アク
セント」と呼ばれ、マークされた音節の高さはまわりの音節より高いというも
のである。もう一つは、「ダイナミック・アクセント」で、マークされた音節の
音量がまわりの音節より強いものである。ダイナミック・アクセントがより多
いので、十分に大きな声で話して、空気を日本語より激しく吐き出さないと、
失敗になる。

アクセントの位置についてのルールはあるが、一般すぎるので、やはり単語を
覚えるときには、アクセントの位置も覚えるのが一番適切な方法であろう。と
もかく、アクセントの位置についてのルールを下に紹介する：

- 1 . アクセントを語幹に置くこと。
- 2 . 接頭辞・接尾辞・語尾はアクセントをもたないこと。
- 3 . 分離動詞では、アクセントを前つづりに置くこと。
- 4 . 複合単語では、前の単語の語幹にアクセントを置くこと。
- 5 . 二つ以上の音節から成り立っている単語では、普通に最後から二番目の音

節にアクセントを置くこと。外来語には例外もあるから、注意！

6. アクセントをもつのは単語の音節で、その隣の音節は決してアクセントをもたないこと。

例：	Beine	(足：複数形)
	gestellt	(置く：過去分詞)
	stellte	(置いた：1/3 人称単数過去形)
	stelle	(置く：1 人称単数現在形)
	aufgeben	(あきらめる)
	Kilometer	(キロメートル)
	Meter	(メートル)

「Beine」では、「Bein」は語幹なので、ルール1により、そこにアクセントを置く。「gestellt」の「ge-」は接頭辞なので、ルール2により、そこにアクセントを置いてはいけない。「stellte」の「-te」は過去の接尾辞なので、ルール2により、そこにアクセントを置いてはいけない。「stelle」の「-e」は1 人称単数現在形の語尾なので、ルール2により、そこにアクセントを置いてはいけない。「aufgeben」は分離動詞で、「auf」は前置詞的な前つづりなので、ルール3により、そこにアクセントを置く。「Kilometer」は複合名詞で、ルール4により、前の名詞にアクセントを置く。「Meter」では、ルール5により、最後からの二番目の音節、つまり始めての音節にアクセントを置く。ルール5は「Kilometer」の「Kilo」にも適用される。

長くて複雑な複合単語では、副アクセントというものもある。メロディック・アクセントなら、副アクセントは主アクセントより低い、他の音節より高い。ダイナミック・アクセントなら、副アクセントは主アクセントより音量が弱い、他の音節より強い。

例： *Überschallgeschwindigkeit* (超音速)

上の単語はまず二つの名詞から成り立っている：「Überschall」と「Geschwindigkeit」。「Überschall」そのものは、複合名詞で、「über」という前置詞と「Schall」という名詞から成り立っている。上記のルール4によると、アクセントは「über」に、そしてルール5によると、最後から二番目、つまり始めての音節に置かなければならない。「Geschwindigkeit」は名詞だが、「ge-」は接頭辞で、「-ig」と「-keit」は双方接尾辞なので、ルール2によると、「schwin」に置

かなければならない。またルール4により、「Überschall」は複合名詞の前の成分なので、「über」に主アクセントを、「schwin」に副アクセントを置かなければならない。アクセントの高さをそれぞれの音節に追加すると、下のようになる：

Überschallgeschwindigkeit

図 1 2 : 「Überschallgeschwindigkeit」の主副アクセント

2) 語末音の無声化

動詞を活用したり、名詞の複数形を作ったりするとき、「無声化」という現象がでてくることもある。まず、動詞を例にする。もし、動詞の語幹が有声の子音（つまり「b・d・g」）に終わると、音節がついてこないかついてくるかによって、発音が違っている。

例： gibb 「p」 (与える：命令形)
 gibt 「pt^h」 (与える：3人称単数現在形)
 gibst 「pst^h」 (与える：2人称単数現在形)
 geben 「b」 (与える：不定形・1/3人称複数現在形)

「gib」・「gibt」・「gibst」は、それぞれ一つの音節なので、「b」は足の成分になるので、有声の子音なのに、無声の発音となる。一方、「geben」は、二つの音節から成り立っており、「ge-ben」という組み立てなので、「b」は二つ目の音節の頭になって、有声の発音になる。さらに、「geben」は二つの音節から成り立っており、「-en」は語尾なので、ルール2によって、そこにアクセントを置いてはいけない。ルール1によると、語幹の音節「ge」に置くべきである。

名詞にも、無声化がある：

例： Kinder 「t^h」 (子供：単数形)
 Kinder 「d」 (子供：複数形)

単数の「Kind」は一つの音節で、「d」はその音節の足の成分なので、無声の発音となる。一方、複数形の「Kinder」は二つの音節から成り立っている所以、「d」は二つ目の音節の頭になり、有声の発音になる。「Kinder」は二つの音節から成り立っており、複数形の「-er」は接尾辞なので、ルール2によって、そこにアクセントを置いてはいけない。ルール1によると、「Kin」に置くべきである。

IV . ドイツ語のメロディ・リズム・文アクセント

コミュニケーションをするとき、最終的には、単語を文にそろえなければならない。この面で日本人がよく間違えるのは、文そのものを発音するより、それぞれの単語を発音してしまうのである。書いた日本語には、西洋の言語とは違って、単語と単語の間に空白（つまりコンピュータかワープロで文章を書くとスペース・バーを押すもの）がない。それは日本人が単語を連続的に発音しないことに大きい理由になる。ドイツ語の音節を理解すると同様に、まず心がまえの問題なのである。文というのは、単語から成り立っているものにもかかわらず、連続的なコミュニケーションの単位なので、従って連続的に発音すべきである。つまり、二つ以上の音節から成り立っている単語を連続的に発音するのと同様に、二つ以上の単語から成り立っている文も連続的に発音するのである。

文は単語と同様に連続的な単位なので、単語にアクセントがあるのと同様に、文には「リズム」がある。

さらに、同じ単語を利用して微妙に違う文が作れるので、違っている文を語順で区別するのが当然である。しかし、語順を変えずに、発音上で区別することもできる。それは「メロディ」と呼ばれる。

コミュニケーションには、様々な機能があるが、聞き手に情報を伝えることは一番重要な機能であろう。伝えたい情報というのは、聞き手がまだ知らなかったり、聞き手が面白く思うような情報なのである。ドイツ語では、新しい情報や面白い情報を指す文成分は「文アクセント」でマークされる。これからドイツ語のメロディ・リズム・文アクセントを簡単に紹介する。

1) ドイツ語のメロディ

ドイツ語のメロディと日本語のメロディは大きく違わない。次の例文を見よう：

例(1)： Du gehst nach Deutschland. (きみはドイツに行く。)

上の平叙文を疑問文にするときは、語順を変えるのが、一つの方法である。

例(2)： Gehst du nach Deutschland? (きみはドイツに行くの?)

しかし、例(1)は疑問として出ることもある。そのときには、文のメロディが違う。メロディを加えたら、下のようになる：

例(3) : Du gehst nach Deutschland. (きみはドイツに行く。)

Du gehst nach Deutschland? (きみはドイツに行くの?)

つまり、平叙文のばあいには、声が文末のほうに下がり、疑問文のばあいには上がるのである。

2) ドイツ語のリズム

ドイツ語と日本語のメロディは比較的に近いが、ドイツ語と日本語のリズムは大きく違っている。簡単にいえば、日本語では文を成り立たせている単語の音節を数えて、三つ目か四つ目ごとにリズムのピークが置かれる。つまり、日本語のリズムの単位は音節である。

一方、ドイツ語ではリズムの単位は音節ではなく、時間である。それを「タクト」と呼ぼう。あるタクトによって、音節が少なければ、リズムのピークが増えるが、音節が多ければ、リズムのピークが減る。つまり、同じドイツ語の文章をゆっくりと読み上げれば、リズムのピークが多く、早く読み上げれば、ピークが少ない。例を見よう：

例(4) : Ein Mops lief in die Küche パッグ(犬の種類)は台所に入り、
und stahl dem Koch ein Ei. 板前さんから卵を盗んだ。
Da nahm der Koch den Löffel 板前さんはスプーンを取って、
und schlug den Mops entzwei. パッグを殴り殺した。

ゆっくりと読み上げると、ピークが八つある：

例(5) : Ein **Mops** lief in die **Küche**
und **stahl** dem Koch ein **Ei**.
Da **nahm** der Koch den **Löffel**
und **schlug** den Mops **entzwei**.

しかし、普通のスピードで読み上げると、ピークは四つしかない：

例(6) : Ein Mops lief in die **Küche**
und stahl dem Koch ein **Ei**.
Da nahm der Koch den **Löffel**

und schlug den Mops entzwei.

ゆっくりした例(5)は早い例(6)と音節が同様なので、ドイツ語ではリズムは音節数と関係ないことが分かる。この点では、ドイツ語は日本語とまったく逆である。日本語の詩を早く読み上げると、音節数によりピークが来なければならないので、ピークが逆に多くなる。

ドイツ語のリズムを覚える方法がいくつかあるが、多分一番適切なのは、短い詩を暗唱することであろう。

ところで、ドイツ語のリズムはゲルマン諸語の特長なので、英語にもあるから、注意を払うことになる。

3) ドイツ語の文アクセント

最終に、ドイツ語の文にもアクセントがあり、リズムのピークと一致することはあるが、違っていることもある。文アクセントは、普通にコミュニケーションに大切な、または新しい情報を指す。コミュニケーションというのは、相手に新しい情報か、相手か自分が面白く思う情報を伝えるだけではないが、それがコミュニケーションの一つの重要な機能なのである。文を作ると、相手がすでに知っていることを指す文成分もいつもあるので、文アクセントを新しい情報や面白い情報を指す文成分に置くのは、ドイツ語の重要な技術である。次の例を見よう：

例(7)： Du gehst nach Deutschland? (きみはドイツに行くの?)

上の例文では、文アクセントが普通である。聞き手が本当にドイツに行くのかを話し手が知りたがっている。しかし、それと違う例もある：

例(8)： Du gehst nach Deutschland? (きみがドイツに行くの?)

上の例文には、文アクセントは「du」に置かれ、本当に聞き手がドイツに行くのかを話し手が知りたがっている。

例(9)： Du gehst nach Deutschland? (きみはドイツに歩いていくの?)

上の例文には、文アクセントは「gehst」に置かれ、それで動詞の意味が違うふうにとられる。「gehen」は「行く」も「歩く」も意味するので、本当にドイツに歩いていくのかを話し手が知りたがっている。

文アクセントが異なるにもかかわらず、メロディが変わらないことに注意を払うべきである。例(7-9)はすべて例(3)の疑問文のメロディにしなければならない。

V. アドバイス

1) ドイツ語の音を記す

日本語と大きく違うところは、母音の長さである。ひらがなに書き換えられる日本語では、長い母音はつねに分かるが、ドイツ語では、長い母音は時々文字で表されたり、表さなかったりする。このため、単語が始めてでるときには、長い母音をマークしたほうがいい。

単語のアクセントもマークすると役に立つ。文章なら、メロディ・文アクセントやポーズなどをマークすればいい。

しかし、ドイツ語の単語をカタカナかひらがなに書き換えるのは、あまりよくない。ドイツ語の単語のそばに日本語の書き換えがあれば、日本人にはまず日本語を見てしまうので、正しい発音が記憶されないから、やめたほうがいい。

2) 発音に重要な筋肉を鍛える

きれいな発音には、唇・舌・喉の筋肉を適切に動かすのが必要である。日本語にはドイツ語みたいに極端に丸い母音がないというのは、それらの母音をきれいに発音する必要な筋肉が弱いということである。

口の筋肉を鍛える一番簡単な方法は、ガムをたくさん噛むことである。特に、あごが強くなるのである。ガムを噛みながら話をするのは、あまり丁寧に見られないが、練習としてとてもいい方法である。

舌を鍛えるには、次の練習がいい：



写真14：舌を鍛える練習

舌をまっすぐ前に出して、そのまま3秒ぐらい待って、それを10回繰り返す。
唇を鍛えるには、次の練習がいい：

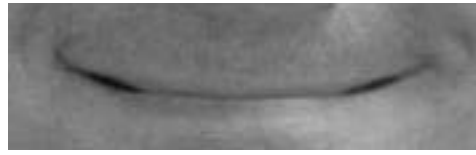


写真15：唇を鍛える練習

まず、口をキスみたいな形にして、そして口のすみをできるだけ開いて、それを10回繰り返す。

一般的に言えば、発音を練習したかったら、できるだけ雑音の多いところであればいい。うるさければうるさいほど、力を入れなければ、発音はきれいにならないので、有利である。

3) 姿勢

言語を話すのは、まず肺から空気を吹きださないといけないので、きれいな姿勢も大切である。肺そのものも筋肉であるが、比較的弱いので、猫背などにすると、肺の力は大きく下がる。

次の姿勢はあまりよくない：



写真16：よくない姿勢

上の姿勢は、背中が丸いので、よくない。左の方では、頭が前に傾きすぎる。右の方では、頭は右手に支えて、口の動きをにぶくする。そのため、次の姿勢もよくない：



写真17：頭を手を支えるよくない姿勢

話しながら、上の姿勢を避けるほうがいい。上よりいい姿勢は次ののである：



写真18：比較的にいい姿勢

上の姿勢は比較的にいいが、まだ完全ではない。視角が下に向きすぎるので、すぐ疲れるのである。しかし、本を手で上げたり、少し前に置いたりすると、とてもいい姿勢となる：



写真19：いい姿勢

4) 練習内容

何を練習すればいいかというと、必ず連続した文章を読むべきである。つまり、単語そのものを発音するより、文や文章を読み上げるのが有益である。単語だけを発音すると、文アクセント・メロディ・リズムなどの練習にならない。発音の様々な特徴を確認するためには、テープに入った文章を練習し、発音して

から、テープを聞いて確認する。

文章のコピーをして、文アクセント・メロディ・リズムをマークしてから、読み上げる。確認のため、マークされない文章を読み上げてみる。

他の方法として、文章を読み上げる自分の声を録音して、本物のテープと比較する。

一番大切なアドバイスとして、「絶対あきらめない」という心構えが好ましい。

Übung macht den Meister!

(名人も修業次第！)

* 安藤良太先生には全文に目を通していただき、日本語の表現を中心に適切なコメントをいただいた。ここに記して感謝にかえたい。

文末脚注：

- 1 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 2 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 3 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 4 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 5 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 6 「Deutsche Phonetik für Ausländer」 p391
- 7 「Deutsche Phonetik für Ausländer」 p396
- 8 「Deutsche Phonetik für Ausländer」 p386
- 9 「The Cambridge Encyclopedia of Language」 p155
- 10 「Deutsche Phonetik für Ausländer」 p316
- 11 「Deutsche Phonetik für Ausländer」 p322

文献：

Crystal, David [ed.] (1987): The Cambridge Encyclopedia of Language. New York: Press Syndicate of the University of Cambridge.

Rausch, Rudolf & Rausch, Ilka (1988): Deutsche Phonetik für Ausländer. Leipzig et.al.: Langenscheidt.